

7 吉田能安先生から戴いた貴重な書

(1) 『致中和』（中和を致す）

この書は、三戸に町営道場が完成した暁に、掲額しようと思い、大学卒業後、私から是非にとお願いし書いて戴きました。書の中央に『中』（中たる）という字があり、縁起が良く、先生と繋がりのある道場には、必ずと言っていいほど掲額されていると伺っていたからです。「出典と意味を、メモ程度でかまいませんのでお教え下さい」と甘えてお願いしたところ、『致中和』の他に、出典を和紙にしたため、お送り戴き、感謝感激でありました。



中 庸（第一章 その二節）

【訓読（書き下し文）】

喜怒哀楽未だ発せざる これを中と謂う
発して皆な節に中る これを和と謂う
中なる者は 天下の大本なり
和なる者は 天下の達道なり
中和を致して 天地位し 万物育す

【口語訳】

喜怒哀楽などの感情が動き出す前の平静な状態、それを中という。（それは偏りも過・不及もなく中正だからである。）感情は動き出したが、それらがみな然るべき節度にぴたりとかなっている状態、それを和という。（感情の乱れがなく、正常な調和を得ているからである。）こうした中こそは世界中の（万事万物の）偉大な根本であり、こうした和こそは世界中いつでもどこでも通用する道である。中と和とを実行しておしきわめれば（人間世界だけではなく、）天地宇宙のあり方も正しい状態に落ち着き、あらゆるものが健全な生育をとげることになるのだ。

『中』 = 過・不及もなく偏りのない中正の状態。

『和』 = 雑多なものを包摂する調和均正の状態。

『致し』 = 極限まで実行しつくすこと。

参照：『ワイド版 岩波文庫 大学・中庸 金谷 治 訳注』

(2) 『代悲白頭翁』（白頭を悲しむ翁に代わりて） 劉 希夷（りゅう きい）

この書は、前にも述べた巻藁射礼が行われた、夏合宿最終日の早朝、民宿の先生のお部屋で、お書きになられたものです。合宿では朝六時から道場で座禅が行われ、その準備が整うと、六時少し前に主将の私がお迎えに参ります。この書をちょうど書き終えた所だったのか、先生は満足感にあふれ、すがすがしい顔をされておりました。加えて初の合宿も成功し、桜美林の将来に確かな手応えを感じられたのかもしれない。今にして思えば、八十歳を一ヶ月後に迎える先生には、法政一高の合宿を終え、休む間もなく連続で桜美林の合宿に臨まれ、大変お疲れのことであつたでありましようが、この朝に最後の氣力を振りしぼり、巻藁射礼を決意されていたものと思われてなりません。

私は幼少より書に接して育ちましたので、多少は書を見る目を持っており、その書を見て感激していると、先生はご機嫌良く、「欲しければやるから持って行け。」と言われましたので、「戴きます」と喜んで頂戴したのであります。合宿を終え、帰省して父に見せると「これは素晴らしい」と、すぐさま表具店へ持って行き、表装をしてくれました。それ以来我が家の床の間に飾られております。



訓読・口語訳については、省略させて戴きます。『漢文』の教科書にも出てくる、有名な『唐詩選』一つで、インターネットで『代悲白頭翁』と打ち込めば、多くの方が読まれ、口語訳をされておりますので、そちらをご覧ください。『この爺さんの白髪頭は、本当に可哀想。これでも昔は、若々しい美少年だったのだ』というくだりは、その当時、今まさに八十歳を迎えようとしていた先生が、我々若者に将来を託そうとされながらも、師範を引き受けた以上、まだまだ老いていられないとう心情が察しられ、故に早朝からこの書をお書きだったのではないかと、胸が熱くなるのを感じずにはいられないのであります。

(3) 『一箭入魂』 (いっせんにゆうこん、「一箭(矢)に魂をこめる」)



一
箭
入
魂

花
押

為
山
崎
紫
光
学
人
八
十
二
翁
紫
鳳
射
人



昭和四十八年一月、冬休みを終え上京し、吉田教場へ新年のご挨拶に伺いますと、恒例のおとそを禮先生から戴きました。教員採用二次試験も合格し、採用内定を戴いたことや、両親の近況、廣楓館の射初会の模様などの報告を済ませると、先生は上機嫌で「ところで卒業祝いは何がいいかな」と言われました。私は間髪入れず「先生の弟子である証に『号』を戴きたいのですが」と申し上げると、頷いてメモ帳を取り出し、『～堂』『～泉』『～山』とお書きになったのでありますが、何か深く思案されるご様子で「卒業式前までに考えておこう」と約束して下さいました。卒業試験が終わり、二月の初旬に稽古に伺うと、先生は笑顔で『号』が書かれたメモ用紙を差し出され、「『紫光』『夢弦』好きな方を選べ」と言われたのであります。『紫光』には先生の号『紫鳳』の一字が、『夢弦』には「無限」の響きがあり、どちらも捨てがたく決断がつかず、翌週まで考えさせて戴くことに致しました。考え悩んだ末に出た結論は『紫光』でありました。『夢弦』はいつの日にか三戸に町営道場が完成した暁に、その道場名に『夢弦館弓道場』を提案しようと。先生にそのことを報告すると、すぐさまこの『一箭入魂』をお書きになり、そしてその横に『為 山崎紫光 学人』と、付け加えて下さったのであります。従ってこの書は、吉田先生が私の号を『紫光』と命名された証明書となりました。その後、吉田先生の高弟、井戸正美範士（吉田教場師範代、昭和二十九年天皇杯獲得者）が、指導のために三戸来られた際に、この和室にお泊まり戴きましたが、目に涙を浮かべ「親父だ！親父だ！山崎君は幸せ者だよ。」と言われながら、この掛け軸や他に私が所持する先生の書を、写真に収めて帰られました。

(4) 『無發貫正鶴』 (無發、正鶴を貫く、「発すること無く的の中心を貫く」)



我が家の和室に飾られた『無發貫正鶴』

九十歳になられた吉田先生が、三戸へご指導にお出でになられた時の書であります。この銘木はある収集家から譲り受け、先生にお見せしたところ、これは素晴らしいと、一気にご揮毫下さいました。「そのような『会』を目指し精進せよ」、との先生のお言葉だと、肝に銘じております。



吉田先生から手形をとって戴き、福岡の久輝様からお作り戴いた弾。この弾にも『無發貫正鶴』を書いて下さいました。現在は、同じく久輝様の二作目の弾を使用しております。



三十九年前に、吉田先生の高弟、鈴木・木村両先生が、範士号を拝受されたのを記念してつくられた弓巻きにも『無發貫正鶴』が。今でも大事に使わせて戴いております。

次の（５）から（１２）の書は、吉田先生から、折々に書いて戴いたものであります。お書きになられた年代順に並べてあります。それぞれの書を戴いた経緯を説明したいのでありますが、記憶が薄れ不確かなところもありますので省略させて戴きます。先生のお顔を思い浮かべながら、じっくりとご覧下さい。

（５）『真如』



（６）『無我』

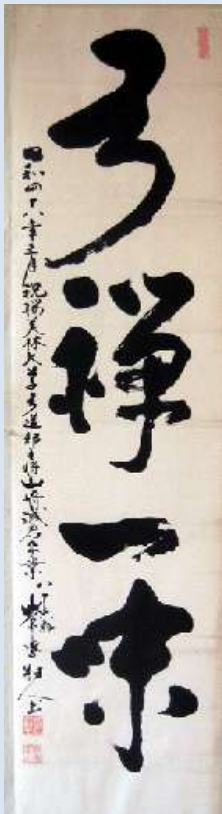


（７）『本日無事』

（事なき日の本）



(8) 『弓禅一味』



(9) 『尊素心』 (素心を尊ぶ)



(10) 『和』



(11) 『超境之勢』



(12) 和歌『梓弓 ~ 』

